

好きなひとが好きな本

月乃可南

「僕にはとつても共感できた本だったから」
知人にそう言われて読んだ本は、好きな作家のものであったにもかかわらず、「いいな」とは思えなかった。というよりは、その人の「共感した」という言葉が気になって、内容が頭に入らなかった。
そんな「気になる本」のことを、川上弘美さんが「本屋さんで」「ゆっくりとさよならをとる」新潮社収録」というエッセイで書いておられる。
気になった理由はほかでもない。川上さんはその相手が好きだったのだ。
好きなひとに本を勧められると、このうえなく複雑な気持ちになる。
同列に論じるのは厚かましいが、私にも経験がある。
勧められたのは、ある建築家のエッセイ集だった。その人は私が建築に興味を持っているのを知っていた。
私はまずうるたえた。
その本の何が彼をひきつけたのか？
読みたいと思うと同時に、読むのがこわい気持ちがあった。
彼が共感を覚えたものが私に理解できなかったら？

「なんとというタイトルなの？」
私は読みたいと思う気持ちから聞き、その
タイトルを書きつけた。
聞いたからには読まなければと思うと、読
むのがこわい気持ちが悪くなった。
ところが、である。
「そんな本はありませんね」本屋の主人はそ
っけなく言った。
「お探しの条件に一致する本はありません」
オンライン書店の検索でもはじめられた。
私はほっとした。これで、こんど「読ん
だ？」と聞かれても、「見つからなかった」
と言える。読むのを少しは先延ばしできる。
しかし、二、三日すると、読みたい気持ち
がまた頭をもたげてきた。
そこで、私はタイトルではなく、著者名を
条件にインターネットで検索した。
最初からそうしなかつたのは、それで見つ
かることをおそれたからだ。
ほんの数秒でその本は見つかった。その建
築家による本は一冊しかなかった。
何のことはない。彼が教えてくれたタイト
ルが間違っていたのだ。
だが、その間違いを知った瞬間、読みたい
気持ちが何倍にも強くなり、読むのがこわい
気持ちを圧倒した。
正しい本のタイトルは『建築のはじまりに
向かつて』（内藤廣著、王国社）だった。
彼が教えてくれたタイトルは『建築に向か
う心』だった。

入れ替わっていた言葉は「はじまり」と「心」。

ふたつの言葉が私のなかで美しく響きあ

った。
彼は住宅やビルではないが、やはり美しい

ものを作るひとである。
彼が生み出したものに触れるとき、私はそ

こに白い光に包まれた彼の手を見る。
欲しい。

本なら望んでもかまわない。
オンラインで注文した本は翌日には届い

た。本を手にしたときはやはり緊張した。
だが、読みはじめてみると、彼がその本に

共感した理由はすぐにわかった。
収められていたエッセイは、時代を超えて

変わらないもの、変わってはいけないものを、
不器用なまでにかたくなに、自分の内と外に

求めつづける建築家の姿勢で満ちていた。
はじめまりの心 建築家の、そして彼の。

とき、「これは彼が書いたものではないの
か」という錯覚に陥りさえしながら、私はそ

の本を読み終えた。
愛しさがこみあげ、涙になってあふれた。